

『 On-line みんなで法華経を学ぼう! 』 vol.18

Sep. 2023

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra” .
(みんなで“法華経観”を見つける旅に出よう)

『妙法蓮華経 勧持品第十三』 (迹門・流通分)

- 『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)
- 『其の習学せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)
- 「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」
(『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たり』) (法師品 二〇九頁 三行)
- 『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)
- 『十分の一でも実践できれば、いや、その一つにでも徹することができれば、りっぱな精進といえる』 (『新釈法華三部経 第一巻』 P8・8行/P5・1行)

※ 表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇔ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)

《提婆達多品の復習》

- ・仏性自覚の教えのしめくり (P15・5行/P10・終5行)
★自分自身の仏性を自覚さえすれば、それがすなわち『悟り』であり、その悟りを得たものがすなわち『仏』にほかならない。『仏性の自覚さえすれば、確かに仏に成れるのだ』
- ・布施とは犠牲と奉仕 (P24・1行/P17・1行)
『六波羅蜜を満足せんと欲するをもって布施を勤行せしに』 (二二六頁 三行)
★「犠牲・奉仕の精神」が菩薩の菩薩たる最大の特質であり、人類の幸福を推し進める本当の智慧は、そうした「愛他の精神」によって養われるものです。
『時に仙人あり、來って王に白して言さく』 (二二六頁 終三行)
『五欲の樂を貪らざりき』 (二二七頁 六行)
この五欲の樂を欲するのは人間の自然な姿であって、決して悪いことではありませんけれども、★あまりにも飽くことなくそれを追求していくならば、行く手には「失望と苦惱」の落

とし穴が待っていることは必至です。～ 一切の社会的紛争というものは、貪欲と貪欲との衝突であると断じて差支えないでしょう。 (P34・1行/P25・1行)

・四摂法 (P41・2行/P31・1行)

仏・菩薩が衆生を摂受（しょうじゅ・寛容と慈悲で教化する）ための四種の徳行。①布施 ②愛語 ③利行（りぎょう・衆生に利益を与える）④同事（衆生に善をなさしめるために、一緒に行動すること）
時には『折伏・しゃくぶく』も大事ですが、衆生済度の本道はあくまでも『摂受・しょうじゅ』です。

・真の善知識 (P43・終3行/P32・終3行)

『提婆達多が善知識に由るが故に』 (二二八頁 四行)

★《善知識》とは・・・善い友たち。

『最高の善友』とは、「人生をどう生きねばならないかという大問題に眼を開かせてくれる友」であるといわなければなりません。～

①憎々（にくにく）しい反抗者や競争相手を、感情のおもむくままに憎悪（そうお）するか？

②あるいは憎悪を乗り越えて自分を高める「よすが」とするか？

⇒ この違いに『凡・ほん』と『聖・しょう』の分かれ目があるのです。

・提婆達多の一生 (P45・3行/P33・終3行)

残念ながら、彼は人間として最大の弱者でありました。①我執を捨てる勇氣を持ち合わせ
ていなかった。おのれの②罪を悔いて非をあらためる勇氣を欠いていたから～ ③反省よりも、我執のほうが強いために、つい心の転回の踏み切りがつかないまま、ズルズルと転落の一路をたどったわけです。

・順縁・逆縁 (P65・終3行/P47・終6行)

もし逆縁にぶつかったら提婆達多に対する釈尊のお考えを思い起こし、大乘的な悟りと勇猛心をもって対処し、自分の『成長のための栄養』としなければなりません。

⇒ これが、ほんとうの勇者であり、信仰者というものであります。

・なぜ悪人も成仏するのか — 「悪人成仏」 (P74・2行/P54・6行)

<仏性の平等> ということ、人々が驚くような劇的な形をもって、人々の胸に強く印象づけるために、提婆達多の例を持ち出されたのです。①行動によって煩惱に善い方向を与え
さえすれば、②仏さまの教えに目覚めて、煩惱にいい方向さえ与えれば、たちまち『善』とな
すことができるようになる。悪人と善人の違いは、ただそれだけの違いなんだ。

・悪道に堕ちず 仏前に生ず (P82・1行/P60・2行)

『妙法華経の提婆達多品を聞いて～蓮華より化生せん』 (二二九頁 六行)

第一は、すべての『人間の本質は仏性である』。この真実がわかり、それを素直に信じてくることができた人は、自らを悪道に陥れることがない（四悪趣におちいることがない）。

第二は、「善い行いを続ければ、必ず良い結果が生じてくる」。反対に「悪い行いを続けていれば、必ず悪い結果が生じてくる」という因果の法則を踏まえて輪廻をお説き下された。人間向上のための修行は、この世だけで終わるものではない《歴劫修行・りやくしゆぎょう》の教え。

・小乗の空と大乘の空 (P101・3行/P74・終3行)

『小乗の空』は、「すべての現象は因と縁から生じる仮の現われ」という教え。（一方）『大乘の空』は、「すべては平等に本仏に生かされている」。すなわち「人間の本質は平等な仏性の現われ」であるという教え。★自他の仏性を自覚し、それを開発することによってこそ、自他ともに救われることができる。それが『本質的な救い』にほかならない。

・仁譲は東洋人の特質 (P112・終3行/P84・1行)

『慈悲仁讓・志意和雅にして能く菩提に至れり』 (二三一頁 終行)

『仁讓・にんじょう』— 『仁』とは、わけへだてない、広い愛情。『讓』とは、へりくだる。自分がどんなに偉くても、威張ったり、高ぶったりしない気持ち。

・志意和雅

(P113・終6行/P84・8行)

『和雅・わけ』— 『和』とは、平和、調和の和。『雅・げ』とは、優雅の雅。正しく、しかも上品で、味わいのあること。その本質的なもの(『和雅』)を失うことは、なんといっても不合理であり、～ 『不幸のもと』になるのだということを、深く考え直す必要があると思います。

・開拓者たる釈尊の大恩

(P119・1行/P88・9行)

『深く罪福の相を達して 徧く十方を照したもう』 (二三二頁 九行)

「罪福の相に深く達して」行けば、人間の本质は「罪福」を超えた『**平等な仏性**』であるという真実に到達せざるを得ないので。

『又聞いて菩提を成ずること唯佛のみ當に證知したもうべし』 (二三二頁 終二行)

大乘の教えになりますと、「信」が第一の要因になります。修行も、その信のうえに立った修行でなければなりません。

(P126・3行/P93・終2行)

・信の力の偉大さ！

(P132・終5行/P99・4行)

★「信」を持つことができれば、その瞬間から我々は真如(本仏)と溶け合い、一体となることができます。(「信」があれば、仏さまのみ心と直通で感応し合うことができるのです。／「信」と「仏力」との感応は瞬時に行なわれるものです)「われわれ人間の本质は仏性である」という真実を心から信じることが、ずっと早道です。

・真の男女平等 — 「女人成仏」

(P152・5行/P113・終3行)

「男女にかかわらず人間の本质は平等に仏なのだ」という大宣言にほかなりません。これほど徹底した男女平等はないではありませんか。

・変成男子

(P152・7行/P114・1行)

当時のインドの社会では、男尊女卑の思想が徹底していました。ですから、女性も仏になれるという思想を当時の大衆に直にぶつけるには、「女性が男性になって成仏する」という形が一番理解しやすい方法だったわけです。～ — 女性の人自身がその劣等感を打ち捨てて、男性と平等である本質を自覚せよ— という教えにほかなりません。

・差別相の自覚も大切

(P156・1行/P116・終4行)

双方がその先天的な特質を生かし合いながら、仲良く手を握ってゆくところに、ほんとうの幸せが生まれることを、大きな目でよくよく見極めて欲しいのであります。



<勸持品のあらすじ>

【薬王菩薩と大樂説(だいぎょせつ)菩薩ら菩薩たちが、仏滅後の広宣流布を誓う】—

【二三五頁 一行】(提婆達多のような極悪人でも、人間より劣る八歳の龍女でも、みな平等に仏になれる教えを聞いた) 薬王菩薩と大樂説(だいぎょせつ)菩薩は、引き連れて来た二万人の菩薩と共に、世尊に『誓いの言葉』を申し上げました。

【二三五頁 二行】(『唯(ただ)願わくは世尊、以て慮(うらおも)いしたもうべからず。』) 「世尊よ。どうぞこの教えの行く末をご心配にならないでください。私たちは世尊がご入滅された後も、多くの人々にこの経典を説き広めてまいります。／(『悪世の衆生は善根(ぜんこ

ん轉(うた)た少(すくな)くして増上慢(ぞうじょうまん)多く、利供養(りくよう)を貪(むさぼり)』
これからのちの悪世の衆生は、善い行いを実践するという心が少なく、逆に『そんなことは知っている。そんなことはやっている。そんなことはわかっている』という増上慢(ぞうじょうまん)の人が多く、自分が知っていることが何よりも正しいと頑(かたく)なに思い、全てを損得で判断し、自分が利することを第一に考え、報酬(ほうしゅう)を求める心が強い人たちがばかりです。／(『不善根(ふぜんこん)を増(ま)し、解脱(げだつ)を遠離(おんり)せん』)そして人を憎(にく)み、恨(うら)み、妬(ねた)む気持ちが強いため、清く正しい心を保てず、澄み切った心境からは遠くかけ離れてしまい、仏の悟りとは真逆(まぎやく)の『苦の人生』を送り続けています。そうした人々を教化することは大変困難ですが、／(『我等當(まき)に大忍力(だいにんりき)を起(おこ)して、～身命(しんみょう)を惜(お)しまざるべし』)私どもは強い忍辱の心をもって臨(のぞ)み、この教えをしっかりと実践して、『不惜身命(ふしやくしんみょう)』の心で教えを説き広めることを決意します」と誓ったのでした。

【数多くの阿羅漢や学・無学の修行者たちが、娑婆世界以外での広宣流布を誓う】——

【二三五頁 六行】すると、先に受記を得た五百人の阿羅漢(あらかん)たちが仏さまに申し上げたのでした。

(『世尊、我等(われら)亦當(またまき)に他の國土(こくど)に於て廣(ひろ)く此の經を説くべし』)「世尊よ。私たちは娑婆国土でない他の国々に向かい、広くこの教えを説き広めていくことをお誓いいたします」

【二三五頁 終三行】つづいて先に受記を得た八千人の学・無学の修行者が立ち上がり、仏さまに合掌して『誓いの言葉』を申し上げたのでした。

「世尊よ。私どももまた、娑婆国土ではない他の国土でこの法を説き広めます。／(『所以(ゆえ)は何(いか)ん、是(こ)の娑婆國(じゃぼこく)の中(うち)は人弊惡(ひとへいあく)多く、増上慢(ぞうじょうまん)を懷(いだ)き功德淺薄(くどくせんぱく)に、瞋濁譎曲(しんじょくてんごく)にして心不實(こころふじつ)なるが故(ゆえ)に』)なぜならこの娑婆国土の人々の悪心は強く、増上慢(ぞうじょうまん)であり、人徳が薄く少ないために怒りやすく、根性が曲がって不正直で、こじつけが上手で、へつらう人が多いために、私たちには少々荷が重いからです」と、正直な思いを隠さず、他国で教えを広めるという誓いを立てたのでした。

【釈尊の養母・摩訶波闍波提(まかはじゃはたい)ら比丘尼たちが、受記を願う】——

【二三六頁 二行】その時、世尊の叔母(おば)であり養母である摩訶波闍波提(まかはじゃはたい)比丘尼と学・無学の六千人の女性修行者たちが立ち上がり、一心に合掌して、まじろぎもせず世尊を仰ぎ見ました。

【摩訶波闍波提ら比丘尼たちの願いを受けて、釈尊が授記】——

【二三六頁 四行】すると世尊が、憍曇彌(きょうどんみ)／摩訶波闍波提の別名)に語られました。

(『何(なん)が故(ゆえ)ぞ憂(うれ)の色にして如來を視(み)る』)「どうしてそんな心配 そんな顔をして私を見るのですか？ 私があなたを名指(なざ)して授記をしないとでも思っているのですか？／(『憍曇彌(きょうどんみ)、我先(われきき)に總(そう)じて一切」

の聲聞(しょうもん)に皆已(みなすで)に授記すと説きき。今汝(いまなんじ)記を知らんと欲せば)
憍曇弥(きょうどんみ)よ。私は先ほど『一切の聲聞はすでに授記されている』と説いたで
はありませんか。しかし、どうしてもそなたが今ここで『成仏の保証』をはっきりと知
りたいのであれば、そのことを告げましょう」

【二三六頁 七行】「何も心配することはありません。あなたは将来、六万八千億という計
り知れない諸仏のもとで学・無学の六千人の女性修行者たちと共に偉大な説法者にな
り、そしてそののち段々と修行を積み重ねて菩薩道を完成し、ついには仏と成るであ
りましょう。その仏の名は『一切衆生喜見(いっさいしゅじょうきけん)如来』と言います。憍曇
弥(きょうどんみ)よ。そののち六千人の菩薩たちもまた順次、授記されてそれぞれが仏の
悟りを得ていくこととなります」と授記されたのでした。

【羅睺羅(らごら)の母・耶輸陀羅(やしゅたら)が授記を願う】——

【二三六頁 終行】その時、この憍曇弥(きょうどんみ)らの授記を聞いていた羅睺羅(らごら)の母
である耶輸陀羅(やしゅたら)比丘尼は、一人寂しく心の中でこう思うのでした。

(『授記の中に於て獨(ひとり)我が名を説きたまわず』) 「世尊は今の授記のなかでも私の
名前をあげられなかった。どうしてだろう」という寂しい思いが込み上げてきて、ど
うすることもできないでいました。

【耶輸陀羅(やしゅたら)へ授記】——

【二三七頁 一行】すると世尊は耶輸陀羅(やしゅたら)の心中を直ぐに感じ取られ、耶輸陀羅に
告げられたのでした。

「あなたは来世において、百万億の諸仏のもとで教えを受け、菩薩道を修めて偉大な
る説法者になります。そしてついには仏道を完成して『善国(ぜんこく)』という国において
仏と成ります。その名を『具足千万光相(ぐそくせんまんこうそう)如来』と言い、寿命は無量
阿僧祇劫(あそうぎこう)という計り知れない期間に及びます」と記を授けられたのでし
た。

【摩訶波闍波提と耶輸陀羅ら比丘尼たちが、娑婆世界以外での広宣流布を誓う】——

【二三七頁 五行】これらの授記を伺った摩訶波闍波提(まかばじゃはたい)比丘尼と耶輸陀羅
(やしゅたら)比丘尼、そしてその率(ひきいる)比丘尼たちは、この授記のお言葉を聞いて大
いに歓喜し、これまでに経験したことのない感激を覚えました。そして仏さまの御前
(おんまえ)に進み出て、偈(げ)を以って感謝を申し上げました。

【(偈)二三七頁 八行】「世尊は一切の大導師であり、天上界・人間界のすべての人々を安穩
へと導かれます。私どもは授記を頂いて何の憂いもなく安らかな境地を得ることがで
きました。誠に有り難うございます」と仏さまを讃歎し、感謝の偈(げ)を唱えまし
た。

【二三七頁 九行】そしてこの偈を終えると、これら諸々の比丘尼たちは仏さまに向かっ
て申し上げました。「世尊よ。私どももまた、/ (『他方(たほう)の國土に於て、廣(ひろ)
く此の經を宣(の)べん。』) 他の國土においてあまねくこの教えを説き広めていきたい
と存じます」と『誓い』を申し上げたのでした。

【無数の菩薩たちが、仏滅後の悪世での広宣流布を誓う】——

【二三七頁 終二行】その時、世尊は八十万億那由他（なゆた）に及び無数の菩薩たちに慈悲の眼差（まなざ）しを注がれました。／（『是（こ）の諸（もろもろ）の菩薩は皆是（みなこ）れ阿惟越致（あゆいおつち）にして、不退の法輪を轉（てん）じ』）これらの菩薩たちはみな、精進の歩みがぶれない『不退転の境地』に住しており、あわせて、あらゆる『善を推し進め、あらゆる悪を押しとどめる力』を具えている菩薩たちでありました。

【二三八頁 一行】すると、この数多くの菩薩たちは一斉に立ち上がって仏さまの御前（おんまえ）に進み出て、仏さまに一心に合掌礼拝しました。そして心の中で次のように思ったのでした。

（『若（も）し世尊、我等（われら）に此の經を持説（じせつ）せよと告勅（ごうちよく）したまわば、當（まさ）に佛の教（おしえ）の如く廣（ひろ）く斯（こ）の法を宣（の）ぶべし』）「もし、世尊が我らに対して『この經をしっかりと保ち、多くの人々に説き広めなさい』とお命じになるならば、我々はそのお言葉の通り説き広めていくに違いない。／（『佛今（ほとけいま）默然（もくねん）として告勅（ごうちよく）せられず。我當（われまさ）に云何（いかな）がすべき』）しかし、仏さまは黙ったまま何もお命じにならない。我々は一体、如何にすべきであろうか」と自問したのでした。

【二三八頁 四行】しかし、菩薩たちは直ぐに答えを見つけ、／（『佛意（ぶつゐ）に敬順（きょうじゆん）し并（ならび）に自ら本願を満ぜんと欲して』）仏さまの御心（みこころ）に素直に従い、自らの本願を達成するために『為（な）すべきことを為（な）す』という思いが定まりました。／

（『師子吼（ししく）を作（な）して、誓言（せいごん）を發（おこ）さく』）そして、菩薩たちはあたかも獅子が叫ぶように、力強い言葉で仏さまに『誓い』を申し上げたのでした」

【二三八頁 五行】「世尊よ。我々は世尊の滅後において十方世界をくまなく巡りわたります。そして多くの衆生は『法華經』を基として『五種法師の行』を實踐し、この教えを心に刻（きざ）んで、正しく記憶にとどめるようになります。しかしこれができるのは、我々の力によるものではありません。／（『皆是（こ）れ佛の威力（いりき）ならん』）すべては仏さまの偉大なるお力によって成し得るものであります。／（『唯（ただ）願わくは世尊、他方（たほう）に在（ましま）すとも遥（はる）かに守護せられよ』）どうか世尊。世尊がもし、はるか遠い世界におられたとしても、我々をお守りください。お願い申し上げます」

【日蓮聖人、『我こそ末法・法華經弘通者』の使命確信の偈 ≪二十行の偈≫】——

【二三八頁 八行】さらにこの無数の菩薩たちは声をそろえて『偈』を唱え、『誓いの言葉』を申し上げたのでした。

【(偈)二三八頁 終三行】（『唯（ただ）願わくは慮（うらおも）いしたもうべからず』）「世尊よ。ご心配なさらないでください。／（『佛の滅度の後（のち）恐怖（くふ）悪世（あくせ）の中に於て我等（われら）當（まさ）に廣（ひろ）く説くべし』）我々は仏さまの滅後、恐ろしい悪世の世の中においてもこの教えを説き広めてまいります」

【仏滅後、法華經流布を阻止する妨害の数々。≪三類の強敵・さんゐのごうてき≫】——

【(偈)二三八頁 終二行】「悪世では、人々は自分の本能の赴（おもむ）くままに行動します。智

慧を持たず、法華經を説き、実践する者に対して悪口雑言(あっこう ぞうごん)を吐(は)き、ののしり、誹謗(ひぼう)罵倒(ばとう)し、刀や棒を振るって傷つけようと害する人々がいます。／(『諸(もろもろ)の無智(むち)の人悪口罵詈(あつくめり)等(とう)し及び刀杖(とうじょう)を加うる者あらん我等皆當(みなまさ)に忍(しの)ぶべし』)しかし私たちは皆、それに耐え忍んでいきます」

—【俗衆増上慢 ぞくしゅう ぞうじょうまん】—

【(偈)二三八頁 終行】(『惡世(あくせ)の中の比丘は邪智(じゃち)にして心諂曲(こころてんごく)に未だ得ざるを爲(こ)れ得たりと謂(おも)い我慢の心充滿(こころじゅうまん)せん』)「末世の悪い世の中では、出家の比丘であっても、よこしまな考えを持ち、心はひねくれ、こじつけやへつらいが盛んで、自分は悟った者、完成した者、正しい者だと思い上がり、慢心の心でいっぱいになっています。当然、自分は慢心でいるなどとは自覚もしていません。自分で気が付かないうちに、そのような慢心の心で満ち溢れています。

—【道門増上慢 どうもん ぞうじょうまん】—

【(偈)二三九頁 一行】(『或(ある)いは阿練若(あれんにゃ)に～自(みづか)ら眞の道(とう)を行はずと謂(おも)うて人間を輕賤(きょうせん)する者あらん』)「また、自分は人里はなれた静かな所に住み、粗末な着物を身に着けて俗世から離れて行いすまして、そのために『自分は清く正しく、眞実の道を行じている』と勝手に信じ込み、『私は清い人間だ』『立派な信仰者だ』」

【(偈)二三九頁 三行】(『利養(りよう)に貪著(とんちやく)するが故(ゆえ)に白衣(びやくえ)のために法を説いて世に恭敬(くぎょう)せらるること六通(ろくつう)の羅漢(らかん)の如くならん』)

「これらの人を僭称増上慢(せんしょう ぞうじょうまん)というのですが、これらの人たちは、悟りすましたような顔をしています。実際は内心、物欲や権勢欲(けんせいよく)、名誉欲でいっぱいです。ですから金持ちや地位の高い人たちのためだけに法を説き、そういう人々からは『六神通を具えた羅漢(らかん)』のように慕(した)われ、敬まわれるでしょう。そればかりではありません。僭称増上慢の者たちの内心は腹黒く、世俗の欲にとらわれています。【(偈)二三九頁 五行】(『名を阿練若(あれんにゃ)に假(か)って好んで我等(われら)が過(とが)を出(いだ)さん』) 見かけは俗世から離れた生活をして、清廉さを装(よそお)っています。そして、あたかも大衆の立場に立っているように見せかけ、そのことを盾(たて)にして末世で法華經を説き、実践する者のアラ探しをして誹謗(ひぼう)します。そして次のように言って非難するでありましょう。【(偈)二三九頁 七行】(『自(みづか)ら此の經典を作つて世間の人を誑惑(おうわく)す』)『あいつらは、自分の利益を得るために外道(げどう)の教えを説いている。しかも勝手に經典を作つて世間の人をたぶらかしている。名誉名声を得たいために、あれこれと經を都合よく解説して説いているんだ』」と。

【(偈)二三九頁 八行】「この僭称(せんしょう)増上慢の人たちは、大衆の中に紛(まぎ)れ、私たちを非難しようと構えます。国王に会えば国王に、大臣に会えば大臣に、バラモンや長者に会えばバラモンや長者に、比丘に会えば比丘に取り入って私たちを非難し、／『是(こ)れ邪見(じゃけん)の人外道(げどう)の論議を説くと謂(い)ん』『あいつらは悪の教えを説き、邪(よこしま)な考えを持って道に外れた教えを説いている』」

人々を惑(まど)わすでありましょう。 —【僭称増上慢 せんしょう ぞうじょうまん】—

≪三類の強敵・さんるいのごうてき≫

【妨害に耐える「柔和忍辱」の姿勢 ≪衣座室の三軌・如来の衣≫の実践】—

【(偈)二三九頁 終三行】(『我等佛を敬(うやま)うが故(ゆえ)に悉(ことごと)く是(こ)の諸悪を忍(しのばん)』) **菩薩**たちはあらためて誓います。「私たちは仏さまを心から敬い、仏さまが説くこの教えも仏さまと同様に敬います。ですから、この教えを広めるためには、以上のような様々な迫害や困難に遭遇しても耐えていきます。／『汝等(なんだち)は皆是(みなこ)れ佛なりと言われん』 また、『おまえたちが仏だと？ 何を偉そうに言ってるんだ』と嘲(あざけ)りの言葉を浴びせかけられても、私たちは耐えてまいります」

【(偈)二三九頁 終行】(『濁劫悪世(じょっこうあくせ)の中には多く諸(もろもろ)の恐怖(くふ)あらん』) 「乱れ、濁りきった五濁(ごじよく)の悪世では、数々の恐ろしいことがあると思いません。そして悪鬼が人々の心の中に忍び込んで私たちを罵(ののし)り、毀(そ)り、辱(はずかし)めるでしょう。【(偈)二四〇頁 二行】(『我等(われら)佛を敬信(きょうしん)して當(まさ)に忍辱の鎧(よろい)を着(き)るべし 是(こ)の經を説かんが爲の故(ゆえ)に此の諸(もろもろ)の難事を忍ばん』) しかし、私たちは仏さまを心から信じているために、忍辱の鎧(よろい)を着て耐え忍んでいきます。【(偈)二四〇頁 三行】(『我身命(しんみょう)を愛せず 但(ただ)無上道を惜(おし)む』) 私たちは**自分の命が惜しいとは思いません**。ただこの最高の道である**無上道に縁を持たない人が一人でもいることが、何よりも惜しいのであります**」

【(偈)二四〇頁 四行】(『我等來世(われららいせ)に於(おい)て佛の所囑(しょぞく)を護持せん』) 「未来の世において、私たちは仏さまから託された『法華經』をしっかりと護持してまいります。世尊がご存知の通り、【(偈)二四〇頁 四行】(『濁世(じょくせ)の惡比丘(あくびく)は佛の方便 隨宜(ずいき)所説(しよせつ)の法を知らず』) 悪世の未来世では、真理を知らない出家修行者たちは、仏さまが方便を用いて相手の機根に依じて説き分けられる教えの真意を理解することができません。【(偈)二四〇頁 五行】(『惡口(あくく)して擧(ひんじ)ゆくし 數數(しばしば)擯出(ひんずい)せられ 塔寺(とうじ)を遠離(おんり)せん』) そのため、そういう者たちから罵倒(ばとう)され、排斥(はいせき)され、説法(せっぽう)の場や寺院から追放(おいはな)されることが起こるのでありましょう。【(偈)二四〇頁 六行】(『是(かく)の如き等(ら)の衆惡(しゅあく)をも 佛の告勅(ごうちよく)を念(おも)うが故(ゆえ)に皆當(みなまさ)に是(こ)の事(じ)を忍ぶべし』) しかし、そのような迫害を受けても、『法華經』を広めることを仏さまから託されたお言葉を大切にして、私たちは耐え忍んでまいります」

【妨害に耐える「大慈悲心」の姿勢 ≪如来の室≫の実践】—

【(偈)二四〇頁 七行】(『諸(もろもろ)の聚落(じゅらく)・城邑(じょうおう)に其(そ)れ法を求むる者あらば 我皆(われみな)其(そ)の所に到(いた)って佛の所囑(しょぞく)の法を説かん』) **菩薩**たちの誓いの言葉は続きます。「私たちはどんな迫害や困難にも恐れません。『法華經』を求める人がいるならば、辺鄙(へんび)な村里であろうと、大都市であろうと、どんな妨害者・強敵(ごうてき)がいても私たちは、**大慈悲の心をもってその人の所に出向き**、仏さまから託されたこの『法華經』を説いてまいります」

【妨害に耐える「一切法空」の姿勢 ≪如来の座≫の実践】—

【(偈)二四〇頁 八行】 (『我は是(こ)れ世尊の使(つかい)なり』) 「私たちは『世尊の使い』です。
(『衆(しゆ)に處(しよ)するに畏(おそ)るる所なし』) そのことを思えば、多くの人々の
前で法を説くことに何一つ恐れ憚(はばか)ることがありましようか。【(偈)二四〇頁 終三行】
(『我當(われまき)に善(よ)く法を説くべし 願わくは佛安穩(ほとけあんのん)に住したまえ』)
相手と一体となる教え《第一義空》を説く『法華經』を、私たちは流布し、全力を尽くしま
す。ですから仏さま、どうぞご安心ください」

【(偈)二四〇頁 終二行】 (『我世尊の前(みまえ) 諸(もろもろ)の來(きた)りたまえる十方の佛に於(お
いて是(かく)の如き誓言(せいごん)を發(おこ)す 佛自ら我が心を知(しろ)しめせ』) さら
に菩薩たちの誓いの言葉は続きます。「私たちは、世尊と、そして十方世界のあら
ゆる所からお越しになられた諸仏の御前(おんまえ)で、以上の『誓い』を申し上げます。
どうぞ私たちの『決意』をお受け取り下さい」と。菩薩たちは力強い決意のことばを
申し述べたのでした。

—【以上、日蓮聖人、『我こそ末法・法華經弘通者』の使命確信の偈 《二十行の偈》】



かんじ 勸持とは

(P157・1行/P117・1行)

「勸持」とは「受持を勸(すす)める」という意味ですが、この品では、人に勧める言葉はほとんど述べられておらず、自らの決意を誓う言葉に終始しています。

『以て慮(もつ うらおも)いたもうべからず。我等佛(われらほとけ)の滅後(めつご)に於て當に此の經典(おい まき こ きょうでん)を奉持(ぶじ)し讀誦(どくじゆ)

し説きたてまつるべし』 (二三五頁 二行)

『惡世(あくせ)の衆生(ぜんこんうた)は善根(すくな)轉(そうじょうまん)た少(りくよう)くして増上(むさぼ)慢(ふぜんこん)多く、利供養(ま)を貪(りくよう)り、不善根(むさぼ)を増し、

解脫(げだつ)を遠離(おんり)せん』 (二三五頁 四行)

『種種(しゅじゆ)に供養(くよう)して身命(しんみょう)を惜まざるべし』 (二三五頁 六行)

ふしやくしんみょう 不惜身命

(P162・終4行/P121・終7行)

仏法の悟りを成就し、それを衆生すべてのものにするためには、自らの身命をなげうっても惜しくはないという精神を言います。しかし、この身命という言葉は、ただ肉体的生命という意味に解するのは、単純すぎます。これにはもっと深い精神的意義が含まれているのです。～

★精神的な意味における「不惜身命」とはどんなことかと言いますと、「小我を捨てる」ことです。樂をしたい、いい生活をしたい、出世したい、名譽を得たいといったような、

★「小さな我れの欲望」を犠牲にすることです。

では、なんのために犠牲にするのか？ ★いうまでもなく「悟り」を得るためです。～ 今ある生命は、最高の悟りを得る修行をするために、与えられたものですから、その意味で生命は、真理を悟るためには大切にしなければなりません。～

要するに★「不惜身命」とは、単に肉体的生命について言うのではなく、★「小我」を捨てて「大我」に生きることであり、という根本義を、心に刻んでおきたいものです。

《息性のひととき ①》

庭野開祖は「この体は、真理の『悟り』を得るため(修行をするため)に与えられたものだ」と説かれています。

— では私は①「自分の体は『悟り』を得るための体だ」と受け止めているか？
それとも、②自分の体を「他の意味のために使っているか？」
振りかえてみましょう。

《息性のひととき ②》

庭野開祖は、『不惜身命』とは『小我を捨てる』ことだ」と説きます。また、庭野光祥次代会長は、『ささやかな《自己中心性》を放棄する』ことの大切さを説いています。ここでいう《自己中心性》の放棄とは、たとえば身近なことという、家族に照れ臭さがある「ありがとう」と言えなかった自分が、その《自己中心性》を捨てて、勇気をもって「ありがとう」を言葉にすることを意味すると説かれています。

— 『小我を捨てる』こと。さらには『ささやかな《自己中心性》を放棄する』こと。これは、私にとって「何を意味するか?」、「何を捨てることなのか?」を考えてみましょう。

摩訶波闍波提比丘尼

(P171・終4行/P128・3行)

お釈迦さまの生母摩耶夫人(まやぶにん)の妹で、シッダールタ太子のご生誕七日目に摩耶夫人が亡くなられると、浄飯王(じょうほんのう)の二番目の夫人となり、生みの母に勝るとも劣らぬ愛情を注いで、太子を育て上げられた人です。

何が故ぞ憂の色にして如来を視る

(P174・7行/P130・3行)

『何が故ぞ憂の色にして如来を視る』 (二三六頁 四行)

どうしてそんな心配そうな顔をして私を見るのですか？

憍曇弥(きょうどんみ)をはじめ、女性の出家修行者たちに優しくお声をかけられるお釈迦さま……。女性に対しても、とてもお優しくあったお方であったことが伺い知れます。

《息性のひととき ③》

『何が故ぞ憂の色にして如来を視る』。

摩訶波闍波提をはじめとする女性の出家修行者たちに対して、釈尊はこのようなお言葉をかけられたのでした。お釈迦さまのお優しいお人柄を伺い知る思いです。

— では私は、このような「優しい言葉」を、夫や妻、家族、同僚、友人等にかけることができている自分でしょうか？ 振り返ってみましょう。

やしゅたら比丘尼

(P179・終2行/P134・終2行)

お釈迦さまの太子時代の妃(きさき)であります。貞節な、おとなしい婦人だったそうですが、しかしシンは大変しっかりとした方だったようです。

《**息**惟のひととき ④》

「耶輸陀羅・やしゅたら比丘尼」を読んで感じたことを、かみ締めてみましょう。
「妻」としての立ち振る舞いのみならず、たとえば一人息子の羅睺羅(らごら)を出家させるように、あえて仕向けたこと。または自身が出家後、町の者たちが供養物を捧げるため、王宮にいた時より豊かだったにもかかわらず、さらにそれを放棄して、別の町へ僧房を移したこと等々。耶輸陀羅比丘尼の事績を振り返って、一人の人間として如何にあったのか? かみ締めてみましょう。

なぜ**竜**女の**成**仏より遅れたか

(P188・3行/P141・7行)

第一は、あまりにも身近な人の教化の難しさということです。(指導者と縁もゆかりもない純粋な弟子の立場であれば)すらすらと法を受けることができるのに対して、(身近な間柄だと)肉親としての感情が災いして、かえって法の受け入れがスムーズにいかないことが、一般的には大いにありうるのです。したがって、摩訶波闍波提(まかはじゃはだい)比丘尼や耶輸陀羅(やしゅたら)比丘尼が、竜女に劣っていたのでは決してありません。

第二は、教えを正しく伝えるかぎりは誰が伝えようと、みんな仏の悟りを得られるのだ——ということが、ここに教えられているのです。(法を受けるのは、身近な人でなければならぬ、などとは一切関係なく)正しい教えをそのまま受け取れば、それで救われるということです。～

とにかく我々は仏さまの教えを学ぶにあたっては、**★いろいろな「既成(きせい)の知識」や「固定した観念」、「身にこびりついた感情をなげうって、白紙になって受け入れることが大切**です。このことを『提婆達多品』『勸持品』から学び取らなければなりません。

《**息**惟のひととき ⑤》

庭野開祖は、「仏さまの教えを学ぶにあたっては、いろいろな『既成の知識』、『固定した観念』、『身にこびりついた感情』をなげうって、**白紙になって受け入れることが大切**です」と説かれています。

— ではこの『既成の知識・固定した観念・身にこびりついた感情』をなげうって白紙なるということは、一体どういうことなのか? 考えてみましょう。

『佛意に敬順し并に自ら本願を満ぜんと欲して～誓言を發さく』(二三八頁 四行)

仏さまの御心(みこころ)に素直に従い、自らの本願を達成するために、迷わず『為(な)すべきことを為(な)す』という思いが定まりました。～そして、力強い言葉で仏さまに、

精進をしていく『誓い』を申し上げたのでした」

『皆是れ佛の威力ならん。唯願わくは世尊、他方に在すとも遥かに守護せられよ』

(二三八頁 七行) しかしこれは(法を説き広めていくことができるのも)、私どもの力ではありません。★すべて仏さまのお力によるものでございます。どうぞ仏さまが他所におられても、私共をお守りください。

《患懼のひととき ⑥》

菩薩たちが、「自ら仏に成るといふ本願に向けて、迷わず精進をする」。そして、「法が広まっていくことができるのも、それは私の力ではない。すべて仏さまのお力だ」と申し上げています。この経文を、あなたはどのように受け止めましたか？
感じたことを噛み締めてみましょう。

二十行の偈

(P196・7行/P147・終4行)

日蓮聖人は、この偈に述べられていることが、一つ残らずご自分の身の上に現われてきたことによって、「われこそ末法の世に法華經の教えを広める使命をもって生まれたものだ」という自覚を得られたといひます。また、この偈は、《法師品第十》の【衣・座・室の三軌】の実践を誓うものだと解釈されています。

三類の強敵/俗衆増上慢

(P198・終2行/P149・終3行) (P222・終2行/P169・2行)

知りもしないのに、知っているかのように錯覚している増上慢の人々をさします。法華經とはどんなものか、一偈一句さえのそいたこともないのに、無責任に悪口を言ったり、迫害を加えたりする一般の社会人です。

— 俗衆増上慢を打ち破るには、法華經知ってもらうよりほかに道はありません。そのためには、法華經を実践する者が自らの言動を正すほかにはない。

三類の強敵/道門増上慢

(P200・終4行/P151・2行) (P224・終4行/P170・6行)

仏道に入りながらつまらない教えを信じて、それを最高のものと思い込み、法華經を罵(のの)いたり、その広まるのを邪魔するような人々を言ひます。

— 他の宗教・宗派はダメなものだと思い込むという錯覚。その錯覚の原因の大半は、宗教者の『非寛容性』にあります。他の宗教・宗派に対する敵視に基づくもの。

三類の強敵/僭聖増上慢

(P201・6行/P152・1行) (P228・終行/P173・4行)

宗教界において高い地位にあり、世の尊敬を受けている人が、その状態に陶醉し、あるいはその地位を守ろうとして、真実の教えをないがしろにしたりする増上慢です。～ いかにも聖人のように行ない澄(す)まし、世間の大衆を「哀れな奴どもだ」と見下しているような宗教者です。自らが聖人であると錯覚し、世間からもそう見られ

ているのですが、人を救い世を救うという肝心な宗教活動をしていないために、本当の聖人ではないのです。それで聖人の名を「**僭称(せんしょう)する**」**増上慢**と言います。
～ 若い頃はよく勉強もし、修行もしたことでしょう。ところが年を取ってしまうと、もうこれで十分だという気持ちを起こし、**勉強や努力の心が鈍ってきた**のです。

《**愚惟(しゆい)のひととき** ⑧》

庭野開祖は特に俗衆**増上慢(ぞくしゅう ぞじょうまん)**に対しては、法華經を知ってもらうよりほかに道はありません。それには、何よりも**法華經を信奉する人が、自らの言動を正し、生活を正すことが大切**です。**生活・言動を通して— 法華經とはこんないい教えですよ— と実証することです**と説かれています。つまり「職場においては有能な働き手となり、家庭においては良き家庭人となり、全ての対人関係に『愛情』と『寛容』の徳を示し、人々の尊敬と親愛を得ることが大切です」と説かれています。

— では私は、「法華經の教えを、自らの生活・言動を通して実証しようとしているか? (日常生活、つまり職場・家庭で実践しているか?)」 振り返ってみましょう。

《**愚惟(しゆい)のひととき** ⑨》

僭聖増上慢(せんしょう ぞじょうまん)について考えてみましょう。僭聖増上慢は、宗教界で高い地位にある者が陥る増上慢ですが、庭野開祖は「若いころ修行や勉強もしたが、年を取って、ある地位に達すると、**もうこれで十分だという気持ちを起こし、勉強や努力の心が鈍る**」ことでもあると指摘されています。

— では、私の信仰姿勢は如何でしょう。たとえ今、年を取っていなかったとしても、将来においてそのようなことに陥る因子はないか? 振り返ってみましょう。

『**是れ邪見(じゃけん)の人 外道(げどう)の論議(ろんぎ)を説く(と)謂(い)わん**』 (二三九頁 終三行)

げどう 外道について

(P206・終3行/P156・4行)

《**外道(げどう)**》 仏教以外の教え。仏さま以外の様々な聖人・賢人の説いた教え。

狭い心で「仏説」ということにとらわれている人々は、お釈迦さまのお口から出たお言葉以外は、すべて外道だとして排斥(はいせき)しようとするのです。

これは大変な誤りであり、お釈迦さまのみ心にそむくものです。～ **現実に人々を救うことができれば、それが仏意(ぶつい)にかなうものである**ということをおぼえてはなりません。もとより仏説を曲げてはなりませんけれども、**★人に即し、時代に即して、あるいは適切な解説を施し、拡大解釈することは、あくまでも正しいこと**であります。

え ぎ しつ きんき じっせん 【**衣・座・室の三軌**】の**実践**

(P210・5行/P148・1行)

☆《**如来(にょらい)の衣(ころも) / 柔和(にゅうわ)忍辱(にんじく)の心**》の**実践**

『**我等(われら)佛(ほとけ)を敬(うやま)うが故(ゆえ)に 悉(ことごと)く是(こ)の諸悪(しよあく)を忍(しの)ばん**』 (二三九頁 終三行)

私たちは仏さまと教えを心から敬っておりますので、この教えを広めるためにはど

んな迫害や困難に遭遇しても耐えていきます。

『皆是れ佛なりと言われん～皆當に忍んで之を受くべし』 (二三九頁 終二行)

「おまえが仏だって？ 大したもんだよ。偉そうに。」という嘲(あざけ)りを受けても～じっとそれに耐えます。

『我を罵詈毀辱せん我等佛を敬信して當に忍辱の鎧を着るべし』 (二四〇頁 一行)

『我身命を愛せず但無上道を惜む』 (二四〇頁 三行)

『我等來世に於て佛の所囑を護持せん』 (二四〇頁 四行)

『濁世の惡比丘は佛の方便隨宜所説の法を知らず』 (二四〇頁 四行)

仏さまが説かれた方便の教え、すなわち相手により、場合によって適切な教え《隨宜諸説(ずいぎしよせつ)の法》の眞実をくみ取ることができず、小乗の教えなどと言って論じる。また、教えの一言一句の表面の意味に従うこと(とらわれて)に汲々(きゅうきゅう)として、本当の生きた大衆を救うすべを知りません。

『佛の告勅を念うが故に皆當に是の事を忍ぶべし』 (二四〇頁 六行)

仏さまから『法華經』を広めることを託されたそのお言葉を大切に、私たちは迫害を耐え忍んでまいります」

☆《如来の室/大慈悲心》の実践

『諸の聚落・城邑に其れ法を求むる者あらば我皆其の所に到って佛の所囑の法を説かん』 (二四〇頁 七行)

『法華經』を求める人がいるならば、たとえ辺鄙(へんび)な村里であろうと、大都市であろうと、どんな妨害者・強敵(ごうてき)がいても私たちは、大慈悲の心をもってその人の所に出向いていき、仏さまから託されたこの『法華經』を説いてまいります。

☆《如来の座/一切法空》の実践

『我は是れ世尊の使なり衆に處するに畏るる所なし我當に善く法を説くべし願

わくは佛安穩に住したまえ』 (二四〇頁 終四行)

私たちは『世尊の使い』です。そのことを思えば、多くの人々の前で法を説くことに何一つ恐れ憚(はばか)ることがありましようか。私どもは、相手と一体となる教えである《第一義空》を説き示す『法華經』を流布するために、全力を尽くします。ですから

仏さま、どうぞご安心ください」

世尊の使い

(P219・1行/P166・3行)

『我は是れ世尊の使なり』— 謙虚ではありますが、自信に満ちたことばです。世尊の使いであるからには、根本真理をしっかり理解していなければなりません。その根本真理のうえに立ち、自由自在に法を説かねばならないのです。その根本真理とは何あるかといえ、『諸法空』ということです。いわゆる『第一義空』です。

《息惟のひととき ⑩》

「『世尊の使い』であるからには、根本真理をしっかり理解していなければなりません。その根本真理とは何であるかといえ、『諸法空』、『第一義空』ということです」と庭野開祖は説きます。

この『第一義空』の意味とは、「現象という現象は、すべて《縁起の法則》によって生じ、移り変わり、滅してゆくもの。すべては等しく《縁起の法則》によって生じ、滅していくということです」と庭野開祖は示しています。

— さて、あなたが理解している《縁起の法則》とは、どのようなものでしょう？ その《縁起の法則》が、等しくみんなに作用しているということを、あなたはどのように受け止めますか。 噛み締めてみましょう。

《息惟のふいかえり まとめ》

今日の『勸持品第十三』の学びを通して、何を学び取ったか？
(または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか？) 振り返ってみましょう。

合 掌